
二匹の蝶

梨音

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二匹の蝶

【Nコード】

N7907Y

【作者名】

梨音

【あらすじ】

「こんな手紙が届いたんです……」 少女が取り出したのは、
“女子高生連続切り裂き事件”の犯人から届いたという脅迫の手紙。
平次は少女 白波舞の護衛を始めたのだが……。

月夜の出会い（前書き）

二人の出会い。

月夜の出会い

それは満月が綺麗な夜の出来事だった。

「い、嫌……」

ニタニタと嫌な笑いを浮かべながら近付いてくる男。
最近この辺に出没するという暴漢だ。

「来ないで……」

「へっへっ」

最悪だ。

何で私が。

私が何をしたっていうの？

「……っ」

背中に壁が当たる。

逃げられないと分かり、私の恐怖は頂点まで達した。
足に力が入らなくなりその場に座りこんでしまう。

伸ばされる男の手。
思わず目を瞑る。

「……？」

しかしいつまで経っても何も起きない。
恐る恐る目を開けると……。

「大丈夫か、アンタ」

「え、」

そこにいたのは暴漢ではなく一人の青年だった。
竹刀袋を背負い、コチラを心配そうに見ている。

青年の足元を見ると、先程の暴漢が気絶していた。
私はこの青年に助けられたのだと、漸く理解できた。

「あ、ありがとうございます」

「オンナノコが夜道を歩くモンやないで？」

「ホレ」と手を差し出される。

青年に引っ張られて私は何とか立ち上がった。

それが彼

西の高校生探偵、服部平次との出会いだった。

月夜の出会い（後書き）

「大阪は今日も平和です。」番外編。

ジャンルは推理となっておりますが、謎やトリックみたいなものは特にありません（笑）

愛しの君（前書き）

舞の心情。

愛しの君

私の最悪な日は、私の最高の日になった。

『大丈夫か、アンタ』

満月を背に佇んでいた彼。

制服越しからでも分かる、鍛えられた身体。

コチヲを射抜くような視線の奥に見える、優しい光。

全てが私の心を掴んで放さない。

『オナナノコが夜道を歩くモンやないで？』

差し出される手。

彼も男なのに、少し前に感じた恐怖は一切無かった。

それどころかドキドキが止まらなくて、彼にこの音が聞こえないかの方が心配だった。

この時の私は暴漢に襲われかけた事はすっかり忘れてて、ただ彼と離れたくないと、それだけを思っていた。

月夜の刹那の邂逅はそれだけだったけど。

私の心には強く焼き付いていて。

いつの間にか私は、彼に恋をしていた。

それは私の初恋で、叶わない事だと分かっている。
唯もう一度、彼に逢いたかった。

愛しの君（後書き）

知らない内に惚れられていた服部平次。

女子高生連続切り裂き事件（前書き）

「月夜の出会い」から約半月後。

女子高生連続切り裂き事件

平次は今朝の朝刊を読みながら思索に耽っていた。

「これで4件目、か……」

平次が考えているのは、今大阪を賑わしている“女子高生連続切り裂き事件”の事だ。

その名の通り、夜道を歩く女子高生がナイフで切りつけられるというもので、約半月の間で被害は4件に上っていた。

第一の被害者は下野美優。

改方の近所にある府立高に通っていて、唯一重傷を負い、未だに意識が戻ってない。

缺で切りつけられた上、後頭部を硬い物で殴られたらしい。校舎裏で倒れている所を発見された。

第二の被害者は山野絵美。

美優の事件の数日後に襲われ、腕に5針縫う怪我を負った。

缺で切りつけられた事と被害者が女子高生である事から、警察は美優の事件と同一犯と睨み、事件は“女子高生連続切り裂き事件”として扱われる事となった。

第三の被害者は中村由紀。

彼女は何と僅かながら顔を見ていた。

証言によると犯人は細身の男で20代後半らしく、警察はこの証言を頼りに捜査中だ。

そして第四の被害者、川内理香。

これは今朝の朝刊に載っていたもので、記事によるとやはり三人と同じく、鋏で右腕を切りつけられたという。

そして第二の被害者とは同じ中学の出身だという事も書かれていた。

今の所警察は、犯人は無差別に襲っていると考えている。

絵美と理香以外、接点がほぼ皆無なのだ。

この二人だって同じ中学出身だが、特に親しい間柄では無いらしい。

「それにしても被害者は女子高生ばかり……か」

平次の頭に浮かぶのは幼馴染の和葉。

和葉も合気道を嗜んでいてそこの男よりも強いとはいえ、そんな事を犯人が知る由もなく。

犯人に襲われる可能性は十分ある。

「……ま、和葉なら犯人投げ飛ばすくらいはやりかねんけどな」

苦笑しながらそう呟くと新聞を床に置き、朝食を食べ始めた。

女子高生連続切り裂き事件（後書き）

この話の事件の概要です。

少女の依頼（前書き）

平次と舞の再会。

少女の依頼

服部平次は今、とある喫茶店にいた。

目の前に座っているのは、先日彼が助けた白波舞という少女。舞は白い封筒を平次の前に差し出した。

「こんな手紙が家に届いたんです……」

平次は舞から封筒を受け取ると、中に入っていた手紙を読み始める。

“ 今度はオマエが切り刻まれる番だ ”

手紙にはそれだけが書かれていた。

「これが届いたんは？」

「一昨日です。最初は悪戯かと思ってたんですけど、怖くて……。それで平次さんに相談を」

確かに犯人から脅迫の手紙が届いたという話は聞いていない。おそらく警察に伝えても悪戯で片付けられかねないだろう。

「これだけやと悪戯の域を出えへんしな……」

平次は悩む。

大滝辺りにこの事を伝えておいた方がいいとは思うが、これだけでは警察も動けない。

かと言って悪戯だと断言できない以上、このまま放って置くワケにもいかない。

平次の出した答えは……。

「よっしゃ、犯人捕まるまでオレがアンタを守ったる」

「え？」

「帰り道アンタの護衛をオレがしたる。それなら犯人も手エ出しにくいやろ。……それでも心配か？」

「い、いえ、そんな！」

「本当にいいんですか？」と聞く舞に、平次は頷いた。

平次は事件が起きて以来和葉を毎日家まで送り届けていたのだが、舞の話を聞いた以上どちらが危険な立場かは明白で。

しかし脅迫の手紙に怯え、己を守る術をもたない少女を優先すべきだとは思いつつも、平次は和葉の顔が頭から離れなかった。それを振り払うかのように冷めたコーヒーを流し込む。

こうして平次の護衛生活が始まった。

少女の依頼（後書き）

展開が早すぎるかな？

あまりにもギャグがない + 和葉達が出ないと話が短くなってしまいます。

幼馴染の憂鬱（前書き）

複雑な乙女心。

幼馴染の憂鬱

最近の和葉はほんの少しだけ不機嫌だ。
原因はもちろん幼馴染の色黒男。
ほら、今も……。

「じゃあまた明日な、和葉」

「ちよつ、平次!？」

「夜に出歩くんじゃないでー」

「平次っ」

最近服部は帰りのHRが終わると、すぐに帰ってしまう。
どうやら事件の関係者である少女を毎日家まで送り届けているらしいが……。

「……もう」

「和葉」

私が声を掛けると、和葉は何とも複雑な表情をしていた。
そりゃあそうだろう。
意中の相手が毎日女の子を迎えに行っているのだから。

たとえそれが事件絡みでも。

……否、事件絡みだからこそ妬くに妬けなくて、余計にイライラが溜まってしまうのか。

「……そりゃあ、アタシとその子、どっちを優先すべきかなんて分かってるけどさ」

女子高生連続切り裂き事件が起きてから、何だかんだ言いつつ服部は毎日和葉と帰ってた。
それが突然コレだもんね。

己を守る術を持つ子と持たない子、危険が確実に迫ってる子とそうじゃない子、比較すればどちらを選ぶかなんて決まってる。
それが探偵たる彼ならば尚更。

和葉はそんな服部を当たり前だと思ってるし、そうでなければ服部じゃないとさえ考えている。
しかし分かっていても、繊細かつ複雑な乙女心は納得できるかと言えばまた別問題で。

色々忙しいのだろう、実際服部がその少女の護衛を始めてから、和葉と服部の会話の機会も減っていた。

これでは和葉のヤキモチもしばらく治まりそうにない。

「大変だねえ」

「ほんまやね」と呟いて、和葉は苦笑していた。

幼馴染の憂鬱（後書き）

分かってても依頼人に少しでも嫉妬してしまう和葉。
そんな彼女の災難は続きます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7907y/>

二匹の蝶

2011年11月23日16時45分発行